

～ セピア色の風景 ～

「縁側と雨戸」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

田舎の縁側といえば、おばあちゃんと猫が座り、日向ぼつこと居眠りをする場所。確かに縫い物しながら、丸まった背中を揺らしていた祖母と、脇に背伸びしたりあくびをするトラ猫がいた。その縁側は子どもの遊び場であり、豆、ゴマ、エゴマ（当時「ジューネン」と言っていた）などを日に当てる乾燥させる場所でもあった。作物に限らず座布団、布団など生活で乾燥したいもの、湿気を取りたいものが、とつかえひつかえ並べられた。

一方、気楽に会話できる交流の場でもあった。近所の人々は敷居をまたぐほどの用事もないときには、縁側に腰掛けた。定期的に来る富山の置き薬屋さんを始め、いわゆるセールの人も、干してある作物を見て「あらら……」などと言いながら縁側で話し始めた。

縁側は、庭との境に雨戸があるうち縁と、無いぬれ縁に分かれる。わが家はうち縁だった。夕方、雨戸を閉めるのが子どもの仕事だった（雨戸を開けるのは早起きの親で、そのガラガラ音で朝を感じた）。縁側の西端には、雨戸を全部収納する家屋からはみ出た「戸袋」があった。夕方、その戸袋から一枚一枚雨戸を取り出しレールに乗せ押し出した。小さい頃は力が無く、一気に全扉を押し出せず数枚ごとに東端まで押した。戸袋の場所は、二階への階段の入口、階上の奥は暗く何か降りてくる感じがした。またその場所は、内便所の入口で上方に便所と縁側両方を照らす薄暗い電球が一個、本当に怖い所で、恐怖心を振り払うように大きな声で歌いながら雨戸を押した。

父親から「うちも昔はぬれ縁だった。夕方になると障子の外側に雨戸をはめ込んだものだ。だから昔の家の敷居には三本の溝があったんだ」と教えられた。うちの東に、近隣にはほとんど無くなっていた茅葺（かやぶき）の古い隣家があった。確かにその家の敷居には、三本の溝があった。そしてぬれ縁というだけあって縁側の板は、傷んでいた。

うち縁であれ、ぬれ縁であれ、雨戸は内と外を仕切るもの、昼と夜を分けるものだった。そして縁側は内でもなく外でもない空間で、内の空気と外の空気が混じり合うところだった。

このセピア色の風景を思い出している。昔でもあり今でもあるこのときは、こころの縁側なのかもしれない。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める